The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜図書紹介＞『戦後ドイツ文学とビューヒナー ：ビューヒナー・レーデを読む』
Author(s)	山本, 佳樹
Citation	大阪大学言語文化学. 1996, 5, p. 202-203
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/78123
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

図書紹介

ここでは、言語文化学会会員が出版に関して大きく係わった図書の紹介をいたします。

ビューヒナー・レーデ論集刊行会編『戦後ドイツ文学とビューヒナー ——ビューヒナー・レーデを読む——』ビューヒナー・レーデ論集刊行会（編集委員：栗林澄夫・谷口廣治・山本佳樹）1995 年、185 頁、1800 円。ISBN4-9900388-1-9

第二次世界大戦後、ゲオルク・ビューヒナー賞がドイツ語圏最大の文学賞の地位を得たことには、さまざまな理由が挙げられるでしょう。まずビューヒナー(1813-37)の持つイメージがあります。当時のドイツ社会を告発し、亡命の地で夭折した革命家。「説明しがたい現代性」を備えた文学作品を残した天才詩人。なんらかの形で常に社会と対峙しつつ、新しい表現を探求する必要に迫られた戦後ドイツの文学状況において、ビューヒナーの名は不滅の輝きを帯び、作家たちが自らの立場を確認するひとつの拠りどころとなりました。またもうひとつの要因として、現代を代表する錚々たる顔ぶれの作家陣がこの賞を受賞し、数多くの名講演が生まれたことがあります。歴代のビューヒナー賞受賞記念講演を通読してみると、それが文学潮流の推移を映す見事なドキュメントにもなっていることがわかります。

この論集は、ビューヒナー講演の精読を通じてビューヒナーと現代ドイツ文学の関係を考察しようとする研究会の成果として編まれました。下程息氏の序論に続いて、クローロ、ケストナー、フリッシュ、ツェラン、ノサック、エンツェンスベルガー、ヴォルフ、ヴァルザー、デュレンマット、シュトラウス、ビーアマンといった各作家の講演を中心とする論文が収められています。ビューヒナーとそれぞれの作家との関わりについてはもちろんのこと、詩的言語、文学とアンガジュマン、政治、フェミニズム、科学、ポストモダン、統一ドイツなど、各論のテーマは現代文学の多様性に対応するべく多岐にわたっています。ただそれらの問題を、ビューヒナーという共通の鏡に照らしながら語ることで、戦後ドイツ文学史のある断面を示すことができたとすれば、執筆者のひとりとして望外の喜びです。

なお装丁は大阪教育大学の島影和夫教授に、編集・組版は本言語文化部の細谷

行輝助教授にご尽力いただき、自費出版ながら美しい本に仕上がりました。(山本佳樹[1))

[1]言語文化部ドイツ語教育講座